



# シリーズ 子どもたちの発達

## 『私たちの保育において、乳児保育の意義として考えていること』

日本の子育てにまつわる『三歳児神話』という根強い価値観に対して、私たちは乳児保育を専門とするものとして、私たちの立場や考えを表明しておくべきだろうと思います。

よく一般的に『赤ちゃんを育てる時、保育園などで小さいうちから過ごすことは、親子の関係や子どもの愛情欲求を満たす上で、本当はよくないことだ』という考えに出会います。

その影響で迷いながら赤ちゃんをあずけたり、あずかったりすること、それは現代社会の中で『子育て観』として、ぜひ改めていきたいことだと思います。

そのためには、2つの側面から“子どもの健やかな発達”ということを考えていく必要があります。

1つは『子どもの必要をできるだけ良く満たせる環境づくり』ということです。

一人の子どもが、人間らしい生活や発達の機会を常に保障されていることは、子どものより良い成長・発達のために、とても大切な条件です。

生まれて間もない頃から、子どもは好奇心に満ちた存在で、何でも知りたがり、やりたがる姿を見せ始めます。

自分で動けるようになると、じっとしてられず、あっちこっちを探索し、目が動き、何か面白いもの・興味のあるものを見つけては手を動かし、大人から見るといたずらし放題となるのですが、実はこうして見て、動き、触ってみる体験を通して、子どもは様々なことを学習していくのです。そうして、いろいろのことを“自分でやる”ことによって、自分の力として身につけていきます。本来、子どもは伸び伸びと自分の目で見たり、学んだり、自分の思いで何かをやってみたりできる、主体的に生活する場や機会に多く出会えることで、生き生きと活動できるのです。

しかし、現代では家族の人数も少なくなっていたり、家庭ではどうしても大人の生活スタイルを中心とした生活が余儀なくされています。

その中で、本来子どもが体験すべきことが十分にできなかつたり、とても限られた場所や時間の中で、日々の長い時間を過ごすこととなれば、大人も子どももストレスを抱えてしまうことは、当然、多くなってきます。

また、他の家族や子どもとの交わりや生活のチャンスが減り、親子も含めた人間関係の持ち方が狭くなってしまふなど、子育て環境は社会一般に照らし合わせてみても、決して良い状況であるとは言いがたいのが現実です。

しかし、どんな毎日も、子どもにとって未来を築くかけがえのない発達を積み重ねていく一日一日であること、そしてその時間は取り戻せないことになりません。

ですから、そうした子どもの発達にとって十分充実した営みがなされることに家庭や保育園という垣根がないようにしていくことが大切なことです。

昔ながらの子育て観として言われてきた『3歳までは母親の愛情に満たされて育つ』必要性は、いつの頃からか誤解された限定的な思想となって、現代の親や子どもの生活をとても狭く窮屈なものにしてしまっています。

一日の四六時中を、お母さんや家庭内の人と共に過ごすことだけが健全な愛着関係を育てるではありません。大切なのは、時間の多さではなく、より充実した質の関わりであることを発達の原因とみれば、むしろ大人の生活領域の中に子どもを引っ張り込んだり、逆に子どもにすべてを優先させるなどの生活の片寄り、子どもの本来の発達を妨げる要因にも考えられます。

子どもがその時々発達にふさわしい環境や刺激を得るチャンスと、大人も子どもも互いに充実した生活を築くということは、大人も子どももより健康的で質の高い愛着・愛情関係を育んでいく、重要な要素です。

大人が様々な人と関わり、様々な活動を行う機会を通して、社会的な適応や価値観を手に入れているように、子どももその時期の発達に適した物や場所、人と関われる環境があるということは、人間らしい生活や発達の機会が保障されるという重要な意味があるといえるでしょう。

う。

そして、そうした『子どもの健やかな発達』を考え、保障するもう一つの側面が“子育ての社会的支援”にあるということです。

現代では、家庭生活や子育ての社会的環境の変化を踏まえて、『子育ては社会全体の責任』であることを児童福祉法という法律ではっきりと明言されるようになりました。(2000年4月改正)

つまり、これまでの『子育ては母親を中心とした家庭の責任で』という考え方を越えて、『子育ては家庭生活を基盤として社会全体の責任で』行っていくことを、法的根拠をもって、明確にされたということでもあります。

ですから、現代の保育園の存在意義は、単に親の都合で子どもを預ける所なのではなく、子育ての社会的資源として活用されることで、本当に“子どもが育つ場所”としての役割を持つことになるのです。

その“場”としての役割を一言で言うならば、『子どもが愛される経験をする』ということに尽きるでしょうか。最初はお父さん・お母さんなどの親に、そして共に過ごす近しい人々に…そうした身近な密度の濃い人たちの経験や人格を通して、広く社会の中で愛される経験をする、その経験はその子の存在が多くの人々に受け止められ、喜ばれることで、子ども自身の心の真ん中にその子の存在を作り上げていくものになることでしょう。

先に述べたように、赤ちゃん時代から子どもはその子なりの興味や好奇心を環境への関わりを通して育み、いろいろなことを学び取りながら発達を重ねているのです。

そして保育園という場所は、“子どもの最善の利益”を保育の営みを通して保証していかうとする場でもあります。これも法律で明言されています。

私たちが、それを実践していけるよう専門性としての努力を行っていくと同時に、多くのお母さんたち、あるいはお父さんたちや家族の方々が、『家庭』という枠だけに縛られず、積極的な子育て環境を築いていく上でのパートナーとして、子どもと共に、保育の場を求めて欲しいと思います。

子どもを見守る目、ひとりの子の発達の道筋を共有する人と場の輪が広く繋がれていくことで、子どもは日々の生活の中で自分という存在を確かなものと感じ、きっとたくさんの利益を得ることでしょう！

このような意味において、私たちは乳児期の保育と子どもを中心とした家庭との連携が相互に十分行われることで、子どもの成長・発達により大きな可能性という扉を開くことができると確信しています。

こうした“子育ての社会的支援”の意味を踏まえて次回は乳児保育と子どもの発達について、その関係を発達の道筋を追いながら、少し詳しく述べていきたいと思っております。

柏市駅前認証保育園 Kid's Encourage  
園長 日下部樹江

